自分たちの手で創る「福祉の街」

―「街づくり」の原点はコミュニティ・ビジネス　―

山極完治（東京都／東邦学園大学地域ビジネス学科）

はじめに
Ⅰ．コミュニティの「これまで」と「これから」
Ⅱ．加速化する「地域が決め手」の時代
　ー焦点は「地域生活圏」
Ⅲ．コミュニティ・ビジネスは街づくりの原点
Ⅳ．労協が創り出す「新しい関係性」
おわりに
　ーコミュニティ・ビジネスの群生が地域社会を変える

はじめに

不安と孤立感にかりたてられ、立ちつくす２１世紀は、同時に「協働の時代」である。

今まで通用していた価値体系が崩れ、「新しい価値観」が生まれる時代。世界は大きな変化の予兆に満ちている。

「自分化」や「遊戯化」あるいは「女性化」、「高齢化」、「少子化」、そして、「ボーダレス化」といった新しい時代の潮流。

「新しい人」は、「これまでにない人」から生まれてくる。２１世紀のキーワードは「女・高・障・子・外」。暮らしの場の歪みを直接肌で感じてきた、女性、高齢者や障害者、子ども、そして特に、アジアの外国人たちののなかに、生活や事業を変えるエネルギーがいっぱい詰まっている。暮らしの場を豊かにデザインするには、生活当事者としての女性の目、高齢者のサクセスフルエイジング・デザイン、障害者や高齢者のバリアフリー・デザイン、この視点を深めたユニバーサル・デザイン、子どもの目から考えるキッズ・デザイン、そして外国人の異文化から見たフォリナーズ・デザインを複合した「生活起点」の考え方が必要だ。

やはり、「新しいこと」は、きまって「これまでにないこと」から生まれてくる。既成価値にとらわれない、違った視点や発想が今こそ必要とされる時代はない。福祉、教育、環境ばかりでなく、非営利組織や地域、あるいは文化、健康、安心といった、これまでにない切り口が新鮮だ。

新しい発想の転換こそが、思わぬ視点や違った意見を取り込んで「活力の源泉」になる。活力の母国は未知の協働体験である。

活力の母国が向かう希望の島は、一人ひとりを大事する、誰もが居心地のいい「多様性に満ちた社会」である。

Ⅰ．コミュニティの「これまで」と「これから」

（1）消費一色となったコミュニティ

① 地域共同体の中に、生きる上で欠かせない「貴重な自己体験」が息づいていた。生産と消費が同じ地域内で行われ、相互に助け合う協働体験、自然に